

資料紹介

元台湾特別志願兵の戦時東ティモール体験 —陳千武氏ヒアリング記録—

後藤 乾一[†] (編・解説)

Wartime Experience in East Timor of Former Taiwanese Army Special Volunteer —Testimonies of Mr. Chen Qian-wu—

Ken'ichi Goto ed..

Immediately after the possession of Taiwan at the end of the 19th century Japan expected the island to serve a role as the base for her southward advance. Especially around the time of eruption of war between Japan and China in July 1937, Taiwan Colonial Government came to push forward three major policies of “Japanization, industrialization and use of Taiwan as a base for Japan's expansion toward south.”

Following the outbreak of the “Greater East Asia War” a great number of Taiwanese young men who had been indoctrinated with the Japanization education were drafted and sent out to Southeast Asia, then called “southern co-prosperity sphere,” as low-class soldiers, as civilian “industrial warriors” or “agricultural warriors”. Included in those young men was a 21-year-old Chen Qian-wu who was sent to Portuguese Timor (now Democratic Republic of Timor-Leste) as a member of the Army Special Volunteer System in the autumn of 1943.

The present information material is a full record of the three and-a-half-hour-long hearing by the “Forum for Research Materials on the Japanese Occupation of East Timor” concerning Chen's wartime experience in East Timor.

Mr. Chen Qian-wu, now the highest figure in the world of poetry in Taiwan visited Japan in the Spring of 2004 and the interview was held at Waseda University's Institute of Asia-Pacific Studies on the 19th of May. The editor's commentary that precedes Mr. Chen's statements points out a serious lag in Japan's studies and collection of materials concerning East Timor during the Japanese occupation, which on the other hand strikingly throws light on the importance of Mr. Chen's testimonies.

解説

現代の台湾詩壇を代表する長老詩人陳千武氏(1922年、台中州南投郡出身)は、台湾が日本の植民地であった「大東亜戦争」のさ中、陸軍特別志願兵⁽¹⁾の一人としてポルトガル領ティモール(現東ティモール民主共和国、2002年5月独立)に徴用された体験を有している。

陳千武氏にとって、この若き日の二年半余の南方体験は、その後の創作活動(詩、小説、評論等)を

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

進める上できわめて重要な意味を持つことになる。そのことは、氏の『陳千武詩集』（秋吉久紀夫訳、土曜美術社出版販売、1993年）ならびに自らの追想風小説『獺女犯』（保坂登志子訳、京都：洛西書院、2000年）、さらには氏の一連の作品を紹介、分析した秋吉久紀夫著『陳千武論-ひとりの元台湾特別志願兵の足跡』（土曜美術社出版販売、1999年）等からも明瞭にうかがうことができる。

今回の陳千武氏とのインタビューは、編者が代表を務める後述の「東ティモール日本占領期史料フォーラム」（2003年7月よりトヨタ財団の研究助成で実施中）の依頼に陳氏がお応え下さったことで実現した。氏は2004年5月、早稲田大学の全学共通講座「台湾研究」の講師として来日されたが、講義終了後の5月19日午後、アジア太平洋研究センターを会場に3時間半にわたり、自らの戦時東（当時の呼称ではポルトガル領）ティモール体験を語って下さった⁽²⁾。ここに紹介するヒアリング記録からもうかがえるように、氏は82歳とはとても思えぬ若さとバイタリティ、そして鮮明な記憶力および何点かの当時の記録をもとに、往時を縦横無尽に語られた。とりわけ我々にとっては、以下の諸点が興味深いものを感じられた。

- 一 ポルトガルの主権下にあったものの日本軍が事実上占領下においた東ティモールで、台湾人陸軍特別志願兵がいかなる体験をもったかについては、上述した文学的色彩の濃い諸文献を除きほとんど知られることがなかった。こうした中で恐らく数少ない存命者の一人である陳千武氏は、自らの徴用前後期の状況をふくめ、私情に流されることなく客観的にその体験を語って下さった。東ティモールのみならず当時「南方共栄圏」と呼称された東南アジアには、台湾、朝鮮等日本の植民地から数多くの青年（含女性）が徴用され、彼等の体験についてはいくつかの先行研究や資料集等でも次第に明らかにされつつあるが、公式植民地と南方占領地の関係（とりわけヒトの流れ）については、今後より克明な調査研究が必要であることはいうまでもない。陳氏が述べられた元台湾特別志願兵の方々の組織「南星会」とも早急にコンタクトを取り、彼らの記録を体系的に整理することも、その第一歩となろう。
- 二 日本との関係でいえば被支配民族の一人である陳氏は、ポルトガルの植民地である東ティモールにおいては自動的に占領者＝支配者の一員になるわけであるが、そうした二律背反に台中一中を卒業した植民地の知識青年陳氏が、いかなる心境、立場で関わったかも興味を引く点である。またこの点は、現地一般民衆が台湾（あるいは朝鮮）出身者と日本人をいかに差異化していたのか、あるいはしていなかったかという問題とも密接に関係してくるものである。
- 三 日本軍が開戦前夜からヨーロッパの小国にして中立を宣明していたポルトガルの植民地ティモールに関心を抱いたのは、そこを拠点に対オーストラリア作戦を展開するためであった⁽³⁾。しかしながら1943年以降、とくに同年2月のガダルカナル島撤退以降、戦局が日本にとって次第に悪化するなかで「対豪作戦」の可能性は事実上ほとんど消滅した。そのため東ティモールには食糧その他の必要物資を輸送する日本軍の船舶は来なくなり、陳氏の表現を借りれば島全体が「捕虜島」の趣きを呈するようになる。こうした中で日本軍は現地自活のため、とりわけ食糧不足と長期戦に備えて現地住民から食糧徴発を行うと共に、労働力を徴用し本格的な自給態勢をとることになる。

陳氏の報告からは、そうした態勢作りの具体的状況、とりわけ土着の首長層の協力が重要な役割を果たしたことがうかがわれる。日本の敗戦後、日本軍に協力したこうした伝統的支配層に属する指導者が各地で少なからず住民の報復対象となったといわれるが、陳氏証言からはその間の事情の一端も汲み取ることが可能である。

四 日本敗戦直前、独立運動が高揚していたジャワへ「転進」した日本軍の一員として陳氏が体験したことも、なかでも台湾同郷会の存在およびその組織との関わりも、従来のインドネシア独立史研究、あるいは華僑・華人史研究でもほとんど知られていなかった事実である。

また1945年8月15日以降、23歳の青年陳千武氏は、日本支配から解放された台湾人としての帰属感情を次第に強めるようになる。「明理台湾」建設を目標に掲げた明台会の有力メンバーとなったのも、そのあらわれであった。今日陳氏の手許に残されている明台会の機関誌『明台報』を分析したクリスチャン・ダニエルスは、同会は中華民国（蒋介石政権）と協力し三民主義による新台湾建設を構想したもので、台湾独立あるいは共産主義への共鳴は一切みられないと指摘している⁽⁴⁾。即ち中華民国体制下での新台湾建設が目標であった。

しかしながら、ジャカルタやバンドゥンの台湾同郷会の台湾系華僑から中国の政治腐敗や陳儀（台湾省行政長官）の台湾統治の実情についての情報に接するにつれ、陳千武氏の心中では国民党に対する猜疑心が深まってゆく。この点についてダニエルスは、『明台報』第五号（1946年6月24日）に掲載された陳有全の論文「勇往邁進を望む」が、台湾の新権力者に対する疑心を象徴するものだと理解を示している。とりわけ陳有全の文章中の「台湾人は自らの自由や政治・経済の地位が中華民国政府によって犯されることがあれば、断固抵抗すべきだ」との一節を重視する⁽⁵⁾。このように明台会会員に思想上の大きな変化を与えたのが、陳千武氏も強調されている中国総領事館の対応であった。1946年3月～4月「同胞」として台湾帰郷への支援を求めた陳氏を含む明台会幹部に対し、中国総領事館側は「日本の走狗」ともいふべき非難をもって応じたのであった。

結局、陳氏をはじめ明台会のメンバーは、イギリス軍の船舶でそれからまもない1947年7月20日、基隆帰還を果たしたのであった。二・二八事件が発生したのはそれからわずか七カ月後のことであった。この明台会をめぐる史話も、台湾現代史の激流の起点をみる上で看過できない意味を有するものである。

東ティモールにおける戦時日本占領については、住民側に与えた影響という重要課題をはじめ、研究的にみると東南アジア他地域と比べ大幅に立ち遅れているのが現実である。また文書資料や口述資料等の基本的な研究工具の面でも決定的に不足している。こうした現状の中で、この陳千武氏の証言がささやかながらも研究上の一つの刺激剤となることを期待すると共に、陳氏の益々のご壮健をフォーラム一同心から祈念する次第である。

なお「東ティモール日本占領期史料フォーラム」は該テーマに関する国際的な資・史料（含文献）状況を明らかにすると共に、この時代の東ティモールに関わった当事者・関係者（東ティモール人、日本人、ポルトガル人、オーストラリア人等）からの聞き取り調査を実施し、それらの成果を日英両語で公

刊することを目的としている。東ティモール、オランダ在住の2名の国外協力者を除くメンバーは、以下の通りである。

ジェフェリー・ガン、倉沢愛子、*後藤乾一、塩崎弘明、*ブラッド・ホートン、山崎功、*山本まゆみ、*吉久明宏、*高橋茂人。また当日は、メンバー以外にも陳千武氏夫人、台湾中央研究院の周婉窈博士氏、トヨタ財団プログラム・オフィサー川崎恵津子氏、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程学生紀旭峰氏の参加があった。本ヒアリングのテープ起こしは紀氏が担当した(*印は、陳千武氏からのヒアリング参加者)。

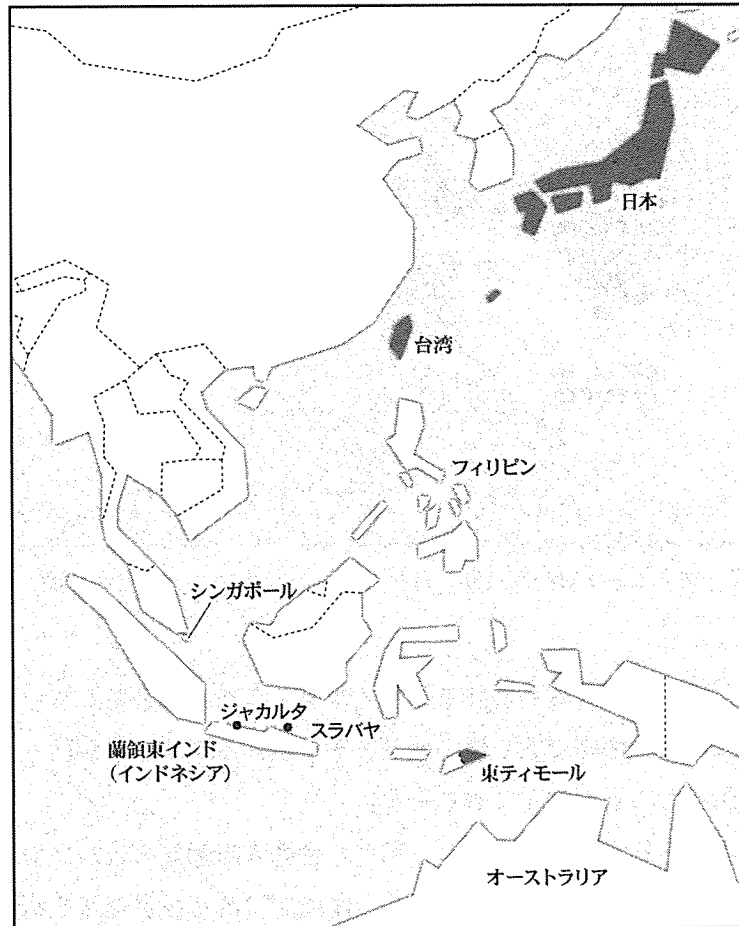
註

- (1) 台湾における陸軍特別志願兵制度については、近藤正己『総力戦と台湾 日本植民地崩壊の研究』刀水書房、1996年、第五章に詳しい。また特別志願兵となった台湾青年の心理と思想を描いた周金波の小説「志願兵」(『文芸台湾』第二巻第六号、1941年9月)を論じた星名宏修『『気候と信仰と持病』論-周金波の台湾文化観』下村作次郎編『よみがえる台湾文学-日本統治期の作家と作品』東方書店、1995年所収も参照。
- (2) 近年、台湾の歴史学界においても戦中期に日本軍の兵士・軍属として「大東亜共栄圏」各地に送られた当事者からの聞き取り調査が活発になっている。たとえば周婉窈編著『台湾籍日本兵座談会記録並相關資料』台北：中央研究院台湾史研究所、1997年、蔡慧玉『走過兩個時代的人：台籍日本兵』台北：中央研究院台湾史研究所、1997年、はその代表的な成果であるが、東ティモール体験者の記録は収められていない。
- (3) この点については、後藤乾一『〈東〉ティモール国際関係史1900-1945』みすず書房、1999年、IV章を参照。
- (4) クリスチャン・ダニエルス(唐立)「雲間の曙光-『明台報』に見られる台湾籍日本兵の戦後台湾像」『アジア・アフリカ言語文化研究』51号、1996年3月、148~149頁。
- (5) 同上、148頁。なおダニエルス論文と並んで前記紀要には『明台報』全5号の全文が、岡崎郁子編で収められている。

陳千武氏とのインタビュー

司会：陳千武先生のお話を聞く前に、手短かに先生の略歴を紹介させていただきます。1922年台中の豊原にお生まれになった先生は台中一中を卒業後、いったんお仕事につきましたが、開戦後の1942年に第一回台湾特別志願兵として志願されました。当時、特別志願兵には20万の台湾青年が志願して1000人しか採用されなかったように競争率が激しかった制度です。その後1943年、台湾の第4部隊に入隊して、2等兵となります。同じ年の9月に、台湾歩兵第2連隊(野戦部隊)に転属されます。この野戦部隊は当時のポルトガル領ティモール(今日の東ティモール)を占領した部隊であり、陳先生は1945年の7月まで東ティモールにおられました。そこから、敗戦の少し前に、インドネシアに向かわれます。インドネシアで独立運動にもかかわるという体験をされます。そして1946年7月に台湾に戻られました。日本占領期に東ティモールに行かれた台湾の方としては大変稀だと思うのですが、戦後の先生は多くの文学作品をご自身の東ティモールでの体験をモチーフに創作されています。

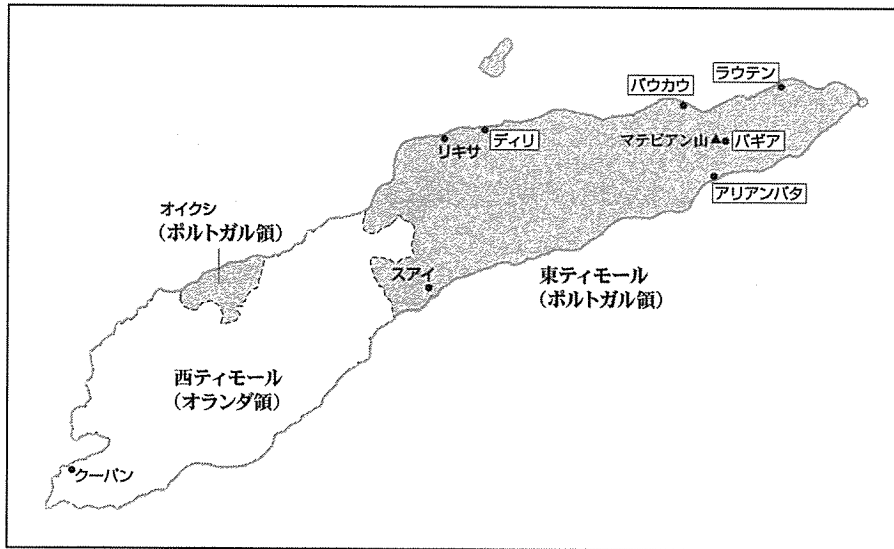
九州大学の秋吉久紀夫先生のご著書に『陳千武論：ひとりの元台湾特別志願兵の足跡』(土曜美術社1997年、現代詩人論叢書第10巻)という作品があります。これは陳先生の作品を分析してそのなかでティモールにかかわる作品を取り上げて、その分析をされたものです。お配りした年譜(略)は、この『陳千武論』の巻末の資料です。さらに東ティモールに関しては先生ご自身の『陳千武詩集：現代中国の詩人』(土曜美術社、1993年)という詩集もあります(秋吉紀久夫訳編)。この詩集の最後のところに、



第1図 日本・台湾・東ティモールの位置関係（作成，菅原祥子）

編者秋吉先生と陳先生との対談記録もあります。そのなかでも、かなり東ティモールについて触れておられます。今日の陳先生にとっても、戦時中の東ティモールでの体験が大変重要な意味をもっているということだと思います。今日はわざわざ台湾からお越しいただきまして本当にありがとうございます。

陳千武：今回、早稲田に来ることができて本当に光栄に思っております。嬉しく思っております。東ティモールについてのことですが、ティモールは当時東と西とに分かれて東のほうはポルトガルの管轄下で、西のほうはオランダの管轄に入っていたわけです。それで私の部隊は1923部隊、即ち台湾歩兵第二連隊（野戦部隊）で、私の『獵女犯』（保坂登志子訳，洛西書院，2000年）という小説のなかに兵隊の兵歴があります。それは台湾の第4部隊から、ティモールに向かったのが1943年の9月30日です。その時、私は二等兵から一等兵に昇級、高雄港から出発して、シンガポール、ジャワのジャカルタ、スラバヤを経由して、ティモール島に行ったわけです。ところが、二晩か、三晩か経って、二隻の輸送船で東ティモールに着いたときには、一隻はすでに攻撃をうけて沈没していました。私たちの乗っていた船はその関係で、その日夕方頃、ティモールのラウテン（中国語では老天，ポルトガル語名ヴィラ・ノヴァ・マラカ）沖に着いたけれど、敵の空襲に備えて、沖の海上をぐるぐる回って、翌朝夜明け方、まだ日が出ていないときに上陸しました。それにしても、上陸の途中でオーストラリアの飛行機の攻撃を受けて、30分後、約3分の1の兵隊が船と共に沈没してしまいました。私は非常に運がよく上陸しまし



第2図 ティモール島略図（陳千武氏の滞在地は四角で囲んだ。作成、同上）

たけれども、亡くなった戦友がずいぶんおりました。東ティモールに駐屯している軍隊は密林のなかに兵舎を作って隠れていて、毎日海岸で石を運んでトーチカを作る臨時工事が何ヶ月か続きました。あの臨時工事はとても苦しかったことを覚えております。

私たちの部隊は、日本人の兵隊だけではなく、私たち台湾人志願兵のほかに沖縄からきた兵隊も一緒に、ラウテンでの臨時工事が終わった後は北海岸から南海岸に跨る横貫道路を構築したのち、ラウテンから南海岸のアリアンバタに移りまして、特攻隊の訓練を受けました。戦争がなくて、毎日オーストラリアからの飛行機がフィリピンへ飛んでいく、フィリピンで攻撃し、爆弾を投下して帰りにここ東ティモールの上空を通っていく。そうすると、残った爆弾をここに落とすしていくのです。夕方に「襲撃・飛行機が帰ってくるぞ」と爆弾を落としたり、落とさなかったりの毎日を過ごしていました。

その後、アリアンバタからバギアに移ったときは、長くバギアで駐屯しておりました。そのときはもうすでに食料が不足していました。私たちの部隊がティモールに着いた後は、もう最後の船で、全然日本との連絡もつかない。その関係でここでは生活できないので、バギアに移って行きました。バギアには昔ポルトガルの統治していた頃のお城があるんです。それにバギアの平地に広い土地があってそこで現地自活で作物を作る生活をしました。バギアの平地には、20公畝の畑（一公畝は約2934坪）があり、また別に10何公畝の水田があります。水田のほうは、稲を植えているわけです。畑のほうは、全然何も植えていないから、当時兵長にあがった私が派遣されていってその20公畝の畑で玉蜀黍を植えたのです。20公畝の畑を耕して玉蜀黍の種を蒔いてそれを収穫するまで、半年くらいですね。それでその収穫した玉蜀黍を干して食料品として野戦倉庫にいます。ま、そういう仕事を、私がやったんですね。ただ一人で。そのとき、このバギア地方には、原住民の酋長が、大王様ですね、おりまして、この大王様の下に小さな国が十カ国あります。その小さな国のなかにも小さな王様がおります。当時、あそこの原住民は、着物を着ていません。女の人は腰巻きひとつ、男は禪一枚だけという生活で、未開発の時代です。あそこの各国の王様が各々自分の国の人力を提供してくれたのが全部で500名です。その原住民

を使役して畑を耕して、玉蜀黍を植えました。500人の原住民のほか、10名の大王のほうからソルダールという原住民の兵隊さんを私の護衛に、一人の秘書（アヅランテ、ポルトガル語）を私のそばにおいて連絡やいろいろ手伝ってくれていました。

その土人はとても淡泊でそして非常に単純で、いろいろやってくれました。でも時々逃げ出したこともあります。そのときは、秘書（アヅランテ）を通じて処分したりしますけれども、わりによく言うことを聞いて、非常にいい仕事をしてくれました。私たちの部隊がジャワに転進してインドのインパール作戦に向かうときに、そのティモールを離れたけれども、離れるとき、500名の原住民たちと秘書（アヅランテ）が跪いて「トゥアン（インドネシア語、大人の意味）残ってください。行かないでください」と言うのです。そういうような経験を、ティモールでいたしました。まず、ここまで、皆様、何か聞きたいことがありましたらどうぞ。

質問：まず最初に、植民地時代のことについてちょっとお尋ねしたいのですが、特別志願兵に志願された動機というのはどういうものだったのでしょうか。何故会社を辞めて、特別志願兵に志願されたのか、その辺の経緯をぜひお聞かせください。

陳千武：このことについて、よく聞かれます。今の若い人、戦後日本植民地時代のことを知らない台湾の人も、皆が非常に不思議に思うんですね。どうして日本の兵隊に志願するのかと言うんですよ。当時、戦争が激しくなったとき、日本としては兵力が、いくらあっても足りないという頃でした。それで台湾特別志願兵制度が施行されたのは、1942年4月、私が製麻会社の監督をやっていたときでした。しかし台湾の志願兵は特別志願兵で、普通の志願兵とは違うわけです。なぜ特別かというと、当時の村長（保正）と隣組の組長（甲長）がある朝、家にやってきまして、「今日は、青年の集会があるから、町の廟に何時までに来てくれ」と言うわけです。それで、その廟に行ったのですが、青年がずらっと長い列をつくってしまっていて、私は後ろに並んで順番を待ち、廟の入り口においてある机の前で甲長や保正、そして警察が非常に嚴重な状況で立っています。後ろからずっと並んで順番が来たとき、兵役係りが聞きます。

「君、志願したか？」

「何をですか？」

「志願兵だよ。」

「志願していません。」

兵役係りは「そうか、それならいい。ここに君の志願書がある。ここへ拇印するように」というわけで、拇印を押したんです。「君が兵を志願したことは、これで書類が整った」というわけで、これが特別という状況です。

質問：林景明先生という、かつて日本で台湾独立運動に関わった方がおられて、その方の『知られざる台湾』という本のなかで、特別志願兵というのは、「特別」がついているから、本当の意味の志願兵ではなく、「強制」された志願兵だとおっしゃっているんですが、その点はいかがですか？

陳千武：「強制」というより、「君、志願しなければいけない」という国の体制を感じさせて、反対することなく志願書に拇印を押すという状況でした。拇印を押したら、この志願はもう完成したというわけ

です。

質問：ご両親の気持ちと言いますか、やはり戦地に行くのだから、息子と二度と会えないのではないかといい、ご両親の反応はいかがなものですか。

陳千武：私が『獵女犯』という小説のなかに書いたように、私が兵隊にとられたことは簡単なことではなく、志願書を出したのち、町役場でやっと合格してはじめて郡や台中州の訓練所で各1週間訓練をやりまます。台湾の青年が日本の兵隊になるというのも、そう簡単ではないわけです。強制的に、例えば中華民國の軍隊が野原で働いている若い青年を捕まえてきて兵隊にするというのは違うのです。だから郡で1週間、訓練と身体検査をして合格し、そしてまた州の訓練所で1週間訓練と身体検査に合格して、はじめて台北六張犁の台湾志願兵訓練所に入って6カ月間訓練を受けるのです。完全にその訓練が終わったあと、この青年は体格にしても、思想にしてもすべてもう間違いないということではじめて兵隊になれるのです。私は、訓練所で6カ月の訓練を終わって一応家に帰り、青年団の訓練を3カ月間青年団の教官としてやって、4月1日に正式に入隊したのです。

質問：台中一中時代の先生は文学青年、文学少年だったということでしたが、そういう文学の世界から武器をもった訓練の生活に入ってその落差はいかがでしたか。

陳千武：そうですね。私が入隊して訓練所に入るまでは、やはり書いたりすることがありましたけれども、訓練所に入れば、もう全然時間がないし、まったく自分の創作など考えられなかった。訓練所を出てから3カ月間の間も青年団の訓練で忙しい時間を過ごしました。正式に入隊したあとも、全然、文学とは離れてしまいました。

質問：お国のために、つまり日本のためにというお気持ちで軍隊に入られましたか。

陳千武：えっと、あの頃の入隊というのは、非常に華やかなもので、例えば私が入隊したとき、出征兵士を見送る沢山の団隊が借り出されて、郡役所から駅まで道路の脇に学生やら、一般の人が旗を持って君が代を歌って見送るわけです。それで汽車に乗って部隊に行くわけです。私の父も、父は当時の町役場で農業技術の指導をやっておりまして、母は母方の兄が漢詩人で、うちの母はそうした兄の影響を受けて、やはり中国の『西遊記』とか、『紅樓夢』とか、いろんな古典文学をよく読んでおりますから、書くことはなかったけれども、また日本語をまだ話すことができなかったけれども、そうした文学的な素養がありまして、私が兵隊に行くときには、母は悲しみを心に秘めて非常に落ち着いた態度で「行きなさい。体に気をつけて」というくらいの程度でした。

質問：まだ戦闘が激しくなくなっていないから、命を落とすことはないとお母様は自らを慰めておられたのでしょうか。

陳千武：命を落とすということは覚悟の上で、母は私に「体に気をつけて、元気でやりなさい」としか言わなかったけれども、私は母の気持ちをよく分かっていました。母は本当に強い気持ちで、自分を支えて、と同時に息子に悲しい思い、惨めな思いをさせまいという強いところがありました。私はその点で母には今でも感謝しています。

質問：日本人の場合ですと、建前として陛下のために一生懸命頑張りなさい、亡くなったら靖国に祀られるからという風に言ったのだと思いますが、そういうことは台湾ではありませんでしたか。

陳千武：台湾ではありません。天皇のためというのは、公的な政府の言い方であって、個人ではそういうことはないです。だから、私の『獵女犯』という小説をごらんになりましたら、当時の私の気持ちがよく出ています。それからティモールにいたころのティモールでの生活も、思い出として『獵女犯』のなかに書いております。

質問：もう一点、1920年代生まれの、いわゆる皇民教育を受けた世代の台湾の方にお話をうかがったのですが、少年時代の石投げ遊びで、石投げの的にはチャーチルやルーズヴェルトと共に蒋介石の写真もあったというのです。つまり台湾の青年だけでも、大陸の親分蒋介石は自分たちと違う国の親分じゃないかという意識を持ち始めたと理解してよいのでしょうか。例えば日中戦争というのは、台湾の少年としてどういうふうに理解されたのでしょうか。

陳千武：私の場合ですね、私は、当時台湾人の子供が入るのは公学校で、日本人の学校は小学校です。公学校と小学校とは違うわけですが、私は公学校で3年、小学校で4年学んでいます。もちろん公学校に入る前は、日本語が話せなかった、田舎におったからです。

質問：「国語家庭」ではなかったのですか。

陳千武：いいえ。子供のときは、日本語ではなく、家の生活はずっと台湾語でした。7歳になって公学校に入って、はじめて日本語を学んだわけです。公学校3年まで勉強したとき、私の日本語は、わりと上手に話せたのです。私の父は私が公学校で勉強するよりも、日本人の子供が勉強する小学校に入れば、日本人と同じようにいい教育が受けられるという風に考えていました。それで、私が公学校の3年を修業したとき、南投小学校に行って、日本語の試験を受けて合格、南投小学校に入学したわけです。それゆえ、小学校で4年間勉強をして、それから台中一中の試験を受けて、合格してそこに入ったわけです。

質問：少年時代の陳先生にとって中国大陸を祖国と思ったことはありますか。

陳千武：私の場合では、小さい時から母がよくわれわれの祖先は「唐山過台湾」＝「唐山から台湾に渡ってきた人」と話してくれています。中国と言わないのです。さっき、後藤先生が言われたけれども、その中国に対する台湾の人の気持ちというものは一般的な考え方、祖国と考えているのも多いけれど、私の場合は母の教育が「唐山から渡ってきた人」と正しく言っています。私の祖先が台湾にきたのは私の6代前の先祖で、清朝時代は男だけが台湾に渡航を許され、女性は禁じられているのに、私の祖先は妻を連れてきたのです。しかも、私のあの祖先の妻は妊娠していて船の中で子供が生まれたのです。大陸を離れて台湾に移住せねばならない緊迫した事情があったかでしょう。今でも疑問に思っているのですが、その6代前の祖先が鹿港（台湾の中部）に上陸し、自分の住むところを探して、南投の名間キュウワ（平埔族の名づけた地名）に籍を置いて、そこで田畑を耕して働き、永住したわけです。私の母の兄が漢詩人で南投における南陽詩社の社長で、そういう文学家庭の影響を受けて、私の大陸に対する考え方は、一般的に言われるようなものではなく、「唐山」という精神的な原郷に憧れていました。中国という国は明の時代から清朝時代になって、それが中華民国に倒されたのです。私の幼い頃母が言うには、中華民国は簡略して「中華」、「中国」という。中国人は、世界の真ん中の国であることを表示し、高ぶっているのだ。一般の人たちが考えている中国が祖国であるというのは、戦後中国の軍隊が台湾に来たとき、非常に歓迎した後、がっかりしてしまい、祖国じゃないと考えが変わってしまいました。

質問：年譜をみますと陳先生は17歳のとき日本に渡航しようとし、大変な思いをされたと書いてあるのですが、そのことが21歳になって特別志願兵に入ることと何かの関係があったのでしょうか？

陳千武：全然ありません。影響も関係ありません。私が台中一中で勉強しているときに、吉川英治の『ひよどり草紙』という小説を読んで、すっかり文学に熱中してしまったのです。学校の成績よりも、図書館に行って小説を読んだり、世界文学を読んだりするのが私の毎日でした。そういう関係で、私は徐々に小説の世界から詩の世界に移っていき、現代詩あるいは俳句、短歌とか、自分で思索したりするようになって、ちょうど3年になったときに、それまでは、母の兄の家に下宿していたのを母の許しを得て、伯父の家からある日本人の家の2階を借りて下宿しました。そのとき隣りに写真屋がありまして日本から帰ってまもないおやじが、日本に住んでいたとの、非常にいいことを言うのですね。それを聞いて、やはり日本に行きたい気持ちになったのです。それで、第3学期のとき（1学期は4月、2学期は9月、3学期は1月始業）、72円の授業料をもらってそれを取めずに、日本行きの切符を買って船に乗ってしまったのです。日本に行って、一旗揚げようという気持ちでした。文学、もしくはできれば早稲田大学にでも入って、という大きな希望で飛び出したわけです。でもどうしてもやはり子供なのです。車に乗るときに、父や母が心配することを考えて、駅で葉書を一枚買って父に送りました。そうしたら、すぐ父が学校の校長に連絡したらしく、台中一中の校長から船まで電報がきて、船長が事務長に命令して、「陳武雄さんはおりませんか？」と船の底で眠っている私を船長室に連れて行きました。「どうして逃げてきたのか」と聞かれました。私は「日本に行って一旗揚げようと思って」と答えました。というのは、台湾では、日本人と台湾人の差別があります。写真屋の人からいろんな話を聞くと日本では差別がなく、本当に自分の実力をもっていろんな仕事ができるというのです。

船長さんは「そういうことを考えても、ありうるけれどもね、人間というのは、臨機応変が必要だ。君はまだ、中学校を卒業していないだろう。帰って中学校を卒業してからやっても遅くはないではないか？」と言いました。彼のいう臨機応変という言葉といろいろな説明を聞いて感動しました。人間というのは、考えを貫くことも必要であるけれども、しかしやはりはっきり良いと悪いを判断してやるべきだというわけで、大人しく帰ってきました。

質問：差別という言葉ですが、台中図書館を利用されるときにも、やはり差別がありましたか。

陳千武：図書館では差別はありません。自分の読みたい本を私はたくさん読みました。

質問：台中図書館は有料制ではなかったですか。

陳千武：台中図書館は有料ではありません。あそこで、本を借りてそこで見るのは別に問題はなく、館外に持ち出す場合でも登録すればよいのです。

質問：そのときは、台湾人だから、何冊しか借りられないということはありませんか。

陳千武：そういうことはありません。誰でも同じように借りられます。

質問：日本の軍隊に入ってティモールに行くことが分かったのはいつの時点ですか。それから訓練中に南方、今の東南アジアのことについてどのような知識をお持ちでしたか。

陳千武：全然ありません。その日その時の命令に従って行動するだけです。

質問：言葉の学習についてはいかがでしたか。

陳千武：だから、どこに行くかということも分からない、軍隊ですから。部隊の中で、ただ訓練、毎日訓練です。射撃の訓練とか、軍人としての訓練だけです。それで、高雄港（台湾の南部）から出発してどこへ行くのかもわかりませんでした。

質問：ティモールに行くと思ったのはいつ頃ですか。

陳千武：着いてから分かりました。

質問：ティモールはどこにあるのか、わかりませんでしたか。

陳千武：全然、分かりません。高雄から船に乗ってシンガポールに行きました。シンガポールで約1カ月くらい、そこで、船を待つために、キャンプにおりました。その後、シンガポールからジャワへ移されましたが、ジャワでは病気が発生したために、ジャカルタの南沖合いのオンス島で1週間の療養、それが終わってまたジャカルタに戻りジャカルタからスラバヤのほうへ一直線、スラバヤから船に乗って、3日か4日かジャワから東へ直接ティモールまで行きました。その間、空襲を一度受けました。激しい空襲でした。

質問：そのとき、台湾歩兵第二連隊は何百、何千人くらいが船にいましたか。

陳千武：船のなかですね、私の『獵女犯』のなかに輸送船のことを書いてあるけれども、兵隊は沖縄・鹿児島あたりの兵隊が主で、あと台湾の志願兵が混ざってしまっていて約千人くらいですね。そのなかに女性（慰安婦）が入っておりました。

質問：インドネシアの「慰安婦」、あるいは台湾から連れてきた「慰安婦」ですか。

陳千武：ジャワからのインドネシア人の慰安婦です。ずいぶんおりましたね。

質問：この年譜をみると、大変詳しく、日にちまで書かれてありますが…。

陳千武：あの年譜は、私の志願兵の兵隊の履歴書で、終戦後、私が部隊を離れるときに渡してくれた記録なのです。

質問：そのコピーはお持ちですか。

陳千武：私の家に本物が残っております。というのは、こういう話をするのはちょっと余談になりますけれども、私が台湾の画家たちをつれて沖縄に行った時、電信関係の会社の社長さんと同じ兵隊だった関係で話し合ったのですが、彼は兵隊をやめてから毎年退職金をもらっているというのです。「おまえ、もらっているかい」と彼に聞かれました。「いいえ、私はもらっていません」と返事しました。台湾人の兵隊は全然そういうものをもらっていません。それは蒋介石が「徳をもって怨みに報いる」と言って、日本は賠償しなくても済むというわけですよ。日本から賠償金をもらったら、共産党と分けなければならぬ。共産党は絶対黙ってはいないから、あっさり徳をもって怨みに報いると大きく出たわけです。けれど、実際においては、蒋介石は台湾に日本が残したすべてを没収し、僕の退職金まで没収したのです。「徳をもって怨みに報いる」という言葉でもって台湾人のすべての権利と日本人が残して行った莫大な財産を全部没収してしまいました。台湾において日本が50年間かかって、建設したいろんな建物、いろんな事業が没収され、それから日本に引き揚げていった日本人は一千円の現金しか持って帰れなかった。その残して行った財産を、全部蒋介石が没収してしまい、彼個人と彼の国民党の財産になっているのです。

陳千武：これは私がいまつくづく思うのに、蒋介石という人の偉いのはそこが偉かったのかもしれない。

質問：繰り返しになりますが、軍隊を離れるとき、その経歴書というものを本人に渡すのですか。

陳千武：あのときは私たちに兵歴表をくれました。戦争が終わって、君たちは軍隊から離れるとき、皆、2階級進級ということを言われました。でも実際には2階級進級しても何にもならないのです。あのときは、もう名前だけだから。それで、渡してくれた兵歴表は2階級進級していません。この兵歴表をもって、私は帰りました。私にとって尊い履歴です。それで、台湾から慰安婦や軍夫たちだった人が日本へ来て賠償を請求しているけれども、私たちの退職金もさっき言ったように、蒋介石がすでに没収してしまっているのから、日本は賠償する必要もないのです。のち台湾にある日台交流協会から、通知がきて当時の兵隊の月給200倍を補給するから申請しなさい」とそれで私は兵歴をコピーして送りました。200倍といっても、当時兵長であったときの月給が31円50銭です。200倍に計算するといくらになるんでしょうね。もらってもいい、もらわなくてもいいという気持ちでした。ところで申請したら、協会のほうから、しかもそれは台北の協会ではなく、高雄の協会から返事がきて「送ってきたコピーの兵歴表は駄目だから、本物を送ってくれ」と言う。私は、本物の兵歴表は200倍よりもっと高い価値のものと思っていたから送らないで、その本物を、いまでも残しています。

質問：コピーをいただくことができますか。

陳千武：はい。私が帰ってから送ります。

質問：履歴書には、例えばバギアに移るなどの記録が書いてあるのですか。

陳千武：そうですね。そこまで詳しく書いているかどうか、とにかくティモールに入ったとき、それからティモールを出たときの日付などが書いてあります。

質問：船はラウテンまで直行したのですか。ディリにはぜんぜん寄らなかったですか。

陳千武：行く時は直接ラウテンまでまっすぐ行って、ティモールから離れる時はディリから出ました。

質問：ディリから出ましたか。

陳千武：ラウテンに入って、そしてバギアに行って、アリアンバタで、決死隊の訓練をうけたあと、またバギアに帰りました。私が20公畝の畑の仕事をしたというのは、バギアに帰ってからしたわけです。これが終わって転戦するから、ディリのほうへ行って、ディリの港から病院船でジャワのスラバヤまで帰ってきました。

質問：スラバヤからラウテンに行くとき、はじめてティモールに行くことが分かったのですか。

陳千武：そうですね。ティモールに行くことは知りませんでした。船で東のほうへ向かって行ったことだけ知っていました。

質問：そのとき、鉄砲隊とか、兵隊の訓練があるかと思うんですが。

陳千武：ラウテンに上陸して野戦部隊に配置されるとまた新兵の訓練を何カ月かやらされました。

質問：そこへ行く前に、例えば、ティモールの状況はどういうものとか、全然教えてくれませんか。

陳千武：全然教えてくれません。

質問：ティモールでは現地住民と如何に接するののかということを書いたポケットに入るくらいの小冊子があるのですが、配られませんでしたか。

陳千武：いいえ。ティモールのラウテン沖に着いたのは黄昏時でした。その前日にディリ沖当りを通過したとき、空爆・空襲でひどい目にあったから、ラウテン沖に着いたとき、船は停まらずぐるぐると海上を回って、翌朝、まだ夜明け前に上陸を許され、それも30分後には飛行機がきて「バン！バン！バン！」と船の頭部、真ん中、後ろと3つの爆弾に当たって30分間後に船は沈んでしまいました。無事の兵士は3分の2位で、野戦部隊から新兵を接收してきた人事将校は「君たち、よく助かったなぁ」「よく来れたなぁ」と喜んですぐ野戦部隊につれて行かれ、それから野戦部隊の新兵訓練を何カ月かやられました。

質問：ティモールに来た目的についてどういうふうに理解されていきましたか。

陳千武：何も軍隊は言いません。

質問：ティモールにいることについて、ご自分にどう説明されたのでしょうか。例えばティモールがもう嫌とか、台湾に帰りたい気持ちも当然あったと思いますが。

陳千武：帰りたいという気持ちがあっても、もうぜんぜん希望のないことだから、軍隊がどういうふう動くか、軍隊についていくほか仕方がないのです。それで、インドのインパールでは、日本軍が負けているから、応援のために台湾軍を行かせるという命令で、バギアからディリへ、ディリの港から病院船に乗ってスラバヤへ行って、スラバヤでは一晩病院に入りました。病院船に乗っている間、オーストラリアの船、飛行機がしょっちゅうついてきていましたが、病院船だから、別にやられなかった。病人を装っているときは、皆白い上着と、白いシャツを着て、軍服を着ておりません。

それに野生のサボテンがありますので、サボテンの赤い実を取ってきてそれを、鉄砲など兵器を梱包した白い敷布の上に赤十字の記号を描いて船の中に入れます。皆、病人に見せかけているので、スラバヤに着いて病院に入ったわけです。翌日軍服を着てジャカルタに送られました。どこに行くか、分かりません。ただインパール作戦で日本軍が負けているから、その応援に勢第3号作戦に参加するということを知らされただけです。

質問：現地で500人のティモールの人を使って自給自足態勢に入ったことに関し、そのときの人間関係はどんなものだったのでしょうか。ティモールの人たちの先生に対する態度というのは、日本人の兵士とと思っているのか、あるいは日本植民地の台湾の人だということを理解していたのでしょうか。

陳千武：あそこの原住民は海外のことを全然知らない。彼らに分からせることは、日本は太陽の国で長い目をあけてみていると目が弾む。だから命令に従うだけだ。われわれはその日本国の兵士だ。ということに分からせるだけで精一杯でした。私は『猟女犯』に、そのことも小説として書いているけれども、あの時男と女合わせて500人をどういう風に使って仕事させるかということを考えました。大人の仕事と子供の仕事を分けるべきだと思ったが、8歳位ですでに結婚しているので、ほとんど大人です。秘書（アヅランテ）が私に彼らの言葉で説明してくれました。

質問：言葉は何語を使われたのですか。

陳千武：テトン語です。私はティモールに行ってバギアにいたとき、准尉の当番でしたので、普通の兵隊みたいに外に出て働いたりすることはない。御飯を准尉にあげたり、洗濯をしたりする仕事です。バギアのお城のなかには准尉と隊長とか住んでおりました。お城を守っているソルダルという兵士がずい

ぶんおりました守衛室におりました。私は准尉の当番ですから、よくその守衛たちと接触しなければならないので、彼らと話しながらメモを取って言葉を覚えるのです。日常会話ですから簡単です。今は忘れてしまいました。覚えているのは水が「イラ」、よく水をもってこい（イラ・マケマウー）と言っていたからです。そのときは、記録を見ながら、彼らと話すという方法で、よく通じていました。

質問：その記録はもう持っていないですか。

陳千武：もっていません。あそこから離れると同時にもう使わなくなったものだから、もうありません。

質問：それは没収されたとかではないのですね。

陳千武：そうじゃなくてその必要がなくなったというわけで、どこかで捨てたらしいです。もって帰っていません。

質問：ティモール関係のもので、どんなものを持って帰られましたか。ほとんど持って帰っておられないでしょうね。

陳千武：ほとんど持って帰っていません。私は重機関銃の銃手で、機関銃を担ぐだけでも大変だったので、何も持って帰っていません。今考えてみたら、ティモールの品で持ち帰って記念にしたかったのは、女性が自分で木綿の採取から手で糸を練って、1年かかって造る手織の腰巻きに使っている布です。

質問：機関銃銃手であっても、実際業務としては現地自活ということで耕作するということだったのですか。

陳千武：本職は機関銃の銃手であるけれども、当時ティモールにおいては、戦争はなかった。ただ、空襲があっただけです。その空襲も先程言いましたように、フィリピンのほうに飛んでいった飛行機が帰りに面白がって「ボンボンボン」と残った爆弾を落としていくだけです。一度飛行機がきた時、私が山の中間に部隊の命令で機関銃を構えて飛んでくる飛行機を照準したことがありました。飛行士までもはっきりみえるので撃ったら命中するのは間違いないでしょう。ところが、「撃て！」の命令は出ない。撃ったら、あとでひどい反撃をうける。だから撃たないのです。ティモールにおいての戦争は警戒しているだけです。撃ち合うことは全然ありません。どちらかという、私は20公畝の畑仕事をして軍の野戦倉庫に食糧を渡すというのが主な仕事でした。

質問：食糧は十分自活できたのでしょうか。ティモール人からの徴発は。

陳千武：はい、バギアのリリカ盆地にはリリカ川が流れていて土地がいいんですね。そこにはさっき言いましたように、10カ国の王様がおまして、すべての生殺権が王様の手にあります。そして王様の財産というのは牛、鉈、それから塩です。だから小王様にしても、200頭とか、400頭とかの牛を持っています。その牛を使って田畑の仕事をするので、土地がよくて水もあるので、よい稲が作れます。その小王国の稲を徴発するために、部隊の命令を受けて私は4,5カ国の小王国の生産高を調査したことがありました。秘書（アツランテ）が案内してくれました。食糧不足と長期戦に備えての徴発準備でした。

当時のティモール人は早婚で結婚したら、大人です。結婚していないのが子供です。何日間か、皆と仲よく仕事していて、ある日、おばさんがやってきて「トゥアン（大人）、あんたの花嫁をつれてきました」と言うのです。冗談だと思ったけれどもそのおばさん真剣な顔をしているのですね。

私：「どこにつれてきたんだ？」

おばさん：「あそこにおります。木の下に陰に座っています。」

これを聞いた周りの人たちは、面白がって「やや、トゥアン（大人）は結婚するんだ」と騒いで、どういう女の子かを見に行こうと皆で行って見たら、なんだ。その木の下の子は5才なんです。あそこの民族の生活はそういうものですね。非常に原始的な生活です。ある人は当時まだ木の上に家を建てて鳥のように住んで生活していました。

また田畑を耕す方法は5人あるいは6人が半円形に立って、人の高さくらいの先を尖らした相思樹の枝を持って歌いながら土地をつつきます。枝がある程度まで土のなかに入ったときに「ヤオヨイ！」と叫んで土地をひっくり返すのです。そういうことを続けてやりながら、土地を耕していく。原始的なやり方ですね。それで、もしも、この畑に水を入れることができるならば、杵を作って漏れないように水をいれます。そして8才、9歳の子供が牛を3頭か4頭くらい田圃にいれて畑の土を踏んで土を柔らかくして稲を蒔くという農作をします。

日本軍は各部落・各小王国ごとに、年にどれだけの稲を収穫できるかを調べます。私も前述のように何遍も畑の耕作面積を調べに行き記録して軍に報告しました。報告すると軍では土地の植えた面積の収穫を計算して、どれだけのお米を供出させるかを決めるわけです。

質問：玉蜀黍のほかに何かありますか。

陳千武：稲です。玉蜀黍は、一般では植えていません。私が20公畝の畑の仕事をしたときに、玉蜀黍を植えただけです。

質問：ティモール人、地元の人から反発とか反抗とか、そういうことはいかがでしたか。

陳千武：大人しいですね。ポルトガル人が統治していた頃は、ポルトガル人に謁見するのに、あそこの王様は50歩離れたところで跪くんです。日本人はそういうことをしなかったから、わりと日本軍に対してあそこの住民は好感をもっていたといってもいいのです。私の場合、向こうの言葉を覚えて一緒に話をすると彼らは嬉しがったです。だから、親しみをもっています。

質問：具体的に戦闘はなかったわけですが、オーストラリアのスパイとか、そういう人はいませんでしたか。そういうことは警戒しておりませんでしたか。

陳千武：警戒していました。でもそういう事件はありませんでした。あそこには日本の兵隊のほかに兵補というのがありまして、インドネシアからずいぶん来ていました。兵補にも隊長がおりまして軍隊の仕事・現地自活の仕事を手伝っていました。

質問：兵補はジャワからですね。

陳千武：ジャワから徴発したものです。台湾で軍夫として徴発されたものと同じ形です。

質問：兵補と「慰安婦」の女性ですね。そのほかにインドネシアからジャワ人の下級労働者というの（労務者を指す）はいなかったですか。

陳千武：いません。兵補はそれに近い仕事をします。もちろん兵補も軍隊組織です。

質問：ちょっと話が戻りますか、スパイとかに対して実際、どういうふうに警戒しておられましたか。

陳千武：軍隊ですからね。スパイといっても、どちらかという、あそこでの生活は台湾での部隊生活

とはあまり変わらないという感じでした。あそこはもう取り残された、いわゆる天然捕虜島ですから、先程言ったようにオーストラリアの飛行機がフィリピンで爆弾を落として、帰りに残った爆弾を落とすという程度でした。だから、戦争もなく、飛行機が飛んでくることに備えての防備くらいでした。それに原住民の生活は、裸で、女の人は腰巻きひとつ、腰巻から上は皆裸です。男は褌ひとつだけです。本当に単純な生活です。普通一般の人民の畑の仕事をしたりすることもないんですね。よそ者が入ってくるような場所ではないので、スパイとか、そういう恐れは感じませんでした。

質問：ピリス大尉という日本軍が大変警戒していたポルトガルの情報将校がいるのですが、そういう名前を聞かなかったですか。

陳千武：全然聞いていません。日本軍が進入したとき、もう全部引き揚げてしまったのでしょうか。

質問：スパイとしてずっと残って山中に潜んで活動をしたんですが、やがて捕まって死刑になった人物ですが、とくにそういうことは聞かなかったですか。

陳千武：私たちの兵隊仲間ではそういうことは聞かなかったです。上級幹部仲間のことは知りませんので。

質問：日本軍は学校を作ったり、社会の末端レベルで何か具体的な占領政策とかはやったのでしょうか。

陳千武：あそこではできません。何しろ、原住民は原始的な放浪生活をしていたから。教育をするということは全然ありえないです。

質問：何のために日本軍は行ったという風に考えたらいいのでしょうか。

陳千武：西ティモールの状況は分かりません。けれど東ティモールは結局、占領してそこを守るというだけです。だから、私たちは当時オーストラリアの監視下にある捕虜島であると自認していたんです。何もすることはなかったです。

質問：陳先生にとって毎日の生活というのは単調といいますか。まあ、つまらない、同じことの繰り返すという印象、思いが強いですか。

陳千武：そうですね。最初的时候はラウテン沖で、実際戦争もなく、海岸の陣地作りという毎日炎天下で石を運んで、働いていたというきつい状態です。それが何か月間か続いて、バギアに移ったあとは演習やその訓練をやったり、山の周囲の地勢を視察してまわるということもあるけれど、別に戦争がないから、しかも食糧がなくなってきているから、現地自活をやることになったのです。

質問：土地は元々は誰のものですか。

陳千武：あその土地は原住民の王が持っている土地です。軍の命令で、軍に提供させて、耕作するのです。

質問：500人の人を使って耕作したとのことですが、その人たちは無給なんですか。それとも手伝ってくれた代わりに、何か食べ物をあげるとかするのでしょうか。

陳千武：ありません。給料もなにもありません。食事も彼らは自分で処理しています。

質問：王様のほうからは。

陳千武：王様からの命令でその仕事をしているのです。あそこは人間の生殺権も王様の手にある。王様の命令には絶対服従です。軍隊の命令で大王を通じて、十個の小王様が命令を実行する。これは台湾の

山地原住民、日本統治期は「高砂族」と称した酋長を頭にした自治制の部落とよく似ています。未開発の原住民ですね。

質問：そうしますと、日本側はある程度ティモールの状況を知っていないと、つまりこの地区では、こういう大王がいてこの程度の権限をもっているとか調べているわけですね。それはどこのレベルで調べているという風に考えていいですか。たとえばポルトガルからの情報をもとにしているとか。

陳千武：これは私たち兵隊には分からないことです。でもポルトガルは敵〔国際法的には中立保持〕でしたから、情報を貰うことはありえないことでしょう。よく分かりませんが、野戦部隊の大隊本部が大王たちと折衝して実行しているのだと思います。

質問：第3大隊の本部はどこにあるのですか。

陳千武：本部は、最初はラウテンにありました。その後バギア台地に移ったのです。

質問：本部というのはディリではなかったのですか。

陳千武：ラウテンから上陸したのは第3大隊です。ほかの大隊は西ティモールのクーパンやディリのほうにおったと思うのです。

質問：陳先生は王たちとの接触というのはあったのですか。

陳千武：いいえ。私自身は接触しません。王たちは隊長と接触します。大王や小王を集めて会議することもあったことを覚えています。

質問：日本人の隊長ですか。

陳千武：はい。日本人の隊長と接触します。日本人隊長の命令が王のところから発布されます。あそこの生活は面白いですね。十何キロ離れていても瞬く間に命令が伝わっていくんです。たとえば、ここで私が命令を発すると、ここにおる原住民が立ち上がって「ああ～誰々は今日のうちに、どこどこに来い」と大きな声で伝達する。そしてこの声が届くところで、約100メートル、200メートルにおる人がそれを聞いたなら、すぐ立ち上がって、また「ああ～…」と先の方へ伝えていきます。そうした伝達方式が習慣的な規則になっています。

質問：日本人とティモール人との間の衝突といますか、それはどんな感じでしたか。

陳千武：衝突はありません。当時のティモール人は温順で自由な放浪の民です。あちこち流れ歩いて果物をとって食べて生きているから、自由で仕事していてもよく黙って逃げてしまいます。そういう関係で私が使っていた500人の中でも初日か20人くらい逃げたんですから。それでソルダルに命令して探して連れて戻ってきます。そんな時、秘書（アヅランテ）は私に言うのです。「トゥアン（大人）、処分しなければならない」と。

どういう風に処分するか。とアヅランテに聞いたなら、「叩くんだ」と言う。逃亡者を並ばせて背中をこちらに向かせ、ムチで叩くと秘書（アヅランテ）に命令をしました。そうしたら、アヅランテは「だめですよ。私たちは同じ民族で、叩いても聞いてくれない。恨みを買うだけです。トゥアン（大人）が叩けば、彼らは非常に大人しく聞いてくれる」と言うのです。

仕方なく、ムチを持って背中に向けてひとり3遍ずつ叩いて、20人も叩き終わった時は私もふらふらと倒れるところでした。叩いたあとは、秘書（アヅランテ）の言った通り、逃亡者もなくなり、非常に

よく言うことを聞くんです。それで、玉蜀黍の生産を完全にやりました。

質問：現地自活ということで、玉蜀黍のほかに塩とか、それからタンパク質ですか、そういうものはどうされましたか。

陳千武：塩は岩塩です。バギア台地から上がった所に広いマテビアン高原がありまして、その上に飛行場があります。その付近で岩塩が取れるという。原住民たちはそれを採りに行きますね。

質問：そういう生活をしていて台湾のことを思い出し、さびしい思いとかありませんでしたか。

陳千武：毎日忙しかったです。非常に緊張した仕事です。収穫した玉蜀黍を倉庫の天井に吊るしてソルダルが土間で火を焚いてあぶるんです。玉蜀黍を乾かしたあと、その玉蜀黍を全部取り出して広い庭に椰子の葉で編んだシートを敷いてその上に玉蜀黍を置くんです。収穫祝いのフェスタ祭で男女が揃ってその上で手を組んで歌を歌って、踊るんです。踊る足で踏んだ玉蜀黍の粒が取れるわけです。粒の取れた玉蜀黍は芯を捨てて粒だけ集めて、椰子の葉で編んだドンゴロスに、玉蜀黍をいれて、それを頭の上ののせて、野戦倉庫に持って行くわけです。女の人、男の人、皆手を使わずに頭の上ののせたまま運んで歩くんです。

質問：スラバヤの方から東ティモールに移るとき、船のなかに「慰安婦」と思われるインドネシア女性がいたといわれました。男の人と女の人がつまり同じ船で行ったわけですね。そのときに秩序を乱すような行動があったとか、あるいはそういう噂を聞いたことはありますか。

陳千武：ありません。船室がぜんぜん違います。区別されていました。

質問：では、区別されることによって秩序が保たれたわけですね。

陳千武：私の小説集『獵女犯』のなかに「輸送船」と題した一篇があります。輸送船の中の状況を知ることができます。ノンフィクション小説ですから、戦場へ死に向かう人たちにとって輸送船の過程は神聖な旅の中で秩序を乱す軽率な行為は考えられませんでした。その小説の中にはある慰安婦の女の子が甲板で水筒をもって水をいれる場面があります。ところが、急に飛行機がきて、彼女が水をまだ入れていないのでまごついている。小説の主人公がそれを見て危ないから「君、舟艇の下へ隠れて」と飛行機の来る方向を見ながら、彼女を庇って走って、飛行機の機関銃掃射を免れる。甲板の上に雨が降っているみたいに弾が飛んでいる。飛行機がすぎたあと、「今だ。はやく船室に入れ！」と彼女を船室に押し入れました。といっても船室はもういっぱいです。それで無理して船室のなかに押し入れる。そういう危険なこともありました。

質問：バギアでの生活の状況について、例えばどのような家に住まれていたとか、それから毎日の食事についてはいかがですか。

陳千武：食事は、軍隊で、同じように炊事兵がやっています。

質問：兵舎で生活なされるんですか。

陳千武：バラックを建てて住んでいました。

質問：何人くらいのバラックを作ったのですか。

陳千武：一部隊ですから。ま、バラック一棟では20、30人でしょうね。

質問：隊長クラス、部隊長などは、どのようなところで生活していました。

陳千武：部隊長はバギアでは城の中に、他の所では部隊長用のバラックを建てています。

質問：食事など、かなり差別を設けていますか。

陳千武：食べ物はいずれも同じです。ただ、当番兵が部隊長の御飯をもっていくというだけです。

質問：今振り返られて、どのような食事でしたか。

陳千武：玉蜀黍とか、椰子の粉とか、そういうのを米と一緒に入れたりして。

質問：鳥とか、豚とか肉類、タンパク質というものは。

陳千武：肉類は、めったにありません。ただまあ、クシア地方では密林の中で野鹿を捉えた時はごちそうでした。

質問：そのバラックは、日本人と台湾の方々の割合はどのくらいでしょうか。

陳千武：部隊では別に日本人の兵隊とか、台湾人の兵隊とか区別はありません。皆同じく軍人の誇りをもっていました。成績のよい悪いによって進級する。私は動作が敏捷でしたから、いつも一選抜の上等兵・兵長に進級しているのです。でも進級発表の前の晩は、きまって進級できない古兵から殴られました。殴られても黙っている他ありません。

質問：琉球というのは、普通の内地と違うというイメージでお考えでしたか。

陳千武：そうですね。当時琉球の兵隊はやはり内地の兵隊と違うという感じがありました。私の『獵女犯』のなかに、お守りの違いで比較して書いています。秋吉さんの著作にもそれに触れて私の小説から切り抜いてその説明があります。

質問：水はどうしたのですか。

陳千武：水は、天然水、雨水、または泉から出てくる水を使っていました。バギア台地からおりてきたところのリリカ盆地というところに川がありました。あたりの原住民たちは川のなかで体を洗ったり、着物を洗ったりするんですね。

質問：先程タンパク質の話がされましたが、オーストラリアの兵隊がよく書いているのはティモール人は闘鶏好きです。それで、西ティモールでは安い値段でよく闘鶏を食べるんですが、東でも同じでしょうか。

陳千武：東のほうは闘鶏はありません。豚を食べる村と、豚を食べない村と、それから鶏を食べる村と鶏を食べない村があるんです。宗教の関係で分かれています。豚を全然食べないというのは、豚は彼らの祖先だからです。秘書（アツランテ）に聞くと豚が彼らの祖先で、木の上のぼって家のなかに入り、女の人と一緒に過ごして翌朝、ぼんやりした目で、自分が木の上に住んでいたことを忘れてしまって踏み出したら、木の上から落ちて死んじゃったという祖先なのです。それから、鶏を食べないというのも、やはり何かそういうような伝説がありまして、鶏を食べないというのです。

質問：バギアには何人くらいの兵隊がいましたか。

陳千武：第3大隊が、ラウテンから上陸してクシア地方の密林に駐屯して、その後、バギアに移ったわけです。バギアに行く道路を開いてバギアまで完全なトラックが通れるような道路を作りました。ラウテンから山手に入ったアビスには野戦病院がありました。大隊は1,2,3の小銃中隊と重機関銃中隊、大砲中隊、合わせて五個中隊に大隊本部で中隊には小隊があるという編制ですから、大体その人数が分か

と思います。当時はマラリアが多くて病院における傷病兵は、1日6人くらいマラリアで犠牲者が出ました。食料が足りないので、病気と飢え死にで、多くの犠牲者が出ています。

質問:「原住民」と接しているとき、陳先生や日本兵は、銃など武器をを持っているんですか、あるいは丸腰で仕事していましたか。

陳千武: あときは銃を持っていません。私が持っているのは手榴弾です。それはいつも身につけているわけで、原住民は「あれ、なんですか?」と聞くんです。「これは僕の命を守ってくれるものです。僕が寝ているとき、誰かがよってきて、僕に危害を加えるときには、これが爆発して相手を殺すんだ」と言うと、彼らはよく信じていて、私が寝ているとき、原住民に用事があって話をする場合は1歩、2歩の前離れたところに、しゃがんで私と話をします。

質問: 先ほど、会話はテトン語をすこしずつ覚えてとおっしゃったけれども、それ以外は、日本語ですか。

陳千武: 原住民と話す時は日本語を使うことはほとんどありません。テトン語で会話します。もちろん、軍隊自体は日本語です。ただ、彼らと接触している時はテトン語ですね。

質問: 戦後ポルトガルとか、オーストラリアの資料を読むと日本の占領期に4万から5万の人が死んだと書いてあるけれども、その数字について、陳先生はどのように思われますか。

陳千武: 私たちには分かりません。私が今言ったように、東ティモールにおいてはひどいときは1日6人くらいマラリアにかかって、それから飢えで死んだと言われています。

質問: 餓死もありましたか。

陳千武: マラリアにかかると、食欲がなくなり、栄養補給もできない。それで死んでいくんです。

質問: 先生が500人の人たちを使っている頃、先生の身の周りのことを世話してくれる特別な使用人みたいな人はいたのでしょうか。秘書(アツランテ)というのはもっと公的な感じがするんですけど…。

陳千武: それを考えるのも当然だと思いますね。私がいた間はひとりの秘書(アツランテ)と10人のソルダルが私の仕事を手伝ってくれました。仕事場は部隊から1,2キロくらい離れています。最初は部隊から通勤ですので朝夕は部隊で食事、お昼は秘書が女の子に命令し、部隊に行って弁当を持ってきてくれます。女の子は結婚している。9歳くらいの子です。夜になると、彼らは自分の家に帰ります。ただ秘書だけは自分の家からお昼御飯をもってくるんです。ところが、その後、秘書は、私の昼御飯まで準備してくれるんです。御飯だけではなくて、竹筒に椰子酒を必ず2本もってくるんです。彼が1本飲む、私に1本飲ませると。飲まなければ同志ではないというので、その酒をずいぶん飲まされました。

陳千武: 玉蜀黍を収穫した後、広いバラック建の倉庫に保存している間は、私も相互にソルダル達と一緒に寝泊まりしていました、その間朝夕の食事はそこで仕事している女の子が、部隊から持ってきてくれました。水浴びする時も、女の子が長い竹筒をもって泉の出る崖に行き、水を入れて持って来てくれるんです。岩の上に彼女が立ったまま、シャワーみたいに水を少しずつこぼしてくれるんです。そういう生活を過ごしました。

質問: この地域は混血の人がどのくらいいるのですか。

陳千武: ポルトガル人と地元の人との混血児は見たことがありません。ラウテンには、華僑の家があり

ました。家といっても実際的にそこに住んでいるわけではなく、ただ、鹿の皮や山の産物を買いに、利用して商売するところです。その点では、ディリのほうがラウテンよりも賑やかです。

質問：ラウテンには中国人は全然いなかったですか。

陳千武：軍隊にいたときは全然いませんでした。戦争でジャワに引き揚げてしまったとか聞きました。

質問：ラウテンには中国人の二世とか、そういう人たちはいましたか。

陳千武：中国人の二世ではなく、中国人と現地人の混血児を見たことがありました。

質問：ティモールコーヒーは、お好きですか。

陳千武：あのころは、コーヒーを飲んだ覚えはありません。コーヒーはマテビアン高原で生産されていると聞いています。

質問：日常的に、どういう飲み物を飲まれましたか。例えば台湾から持ってきたお茶とか。

陳千武：台湾からのお茶は全然ありません。あそこの水を飲んでいるだけです。私たちがいたときは全然船も入ってこなければ輸送・補給もないのですから。

質問：そういった生活は何年ぐらい続くのかという、不安感あるいは絶望感というものはありませんでしたか。

陳千武：そうですね。戦争が持久戦に入ってどこまで続くかということは考えますけれども、どちらかという、あそこは捕虜島ですから。

質問：たとえば、フィリピンから帰ってきた飛行機が増えてきて、これでだんだん戦局が日本に不利となってきたと思われましたか。

陳千武：いいえ。フィリピンから帰ってきた飛行機は、最初はよく弾薬を落としていきましたけれど、しまいには全部素通りでした。だからどういうわけで素通りだったのか、わけも分からないし、一般の兵隊には分かりません。だから、勢第三号作戦で台湾軍を移動させたら、東ティモールは空っぽになって軍隊もいなくなり戦地というよりもただの捕虜島です。

質問：1945年の7月に、ジャワに行かれますが、そのときはティモールを去ることに對してどういう気持ちでしたか。

陳千武：ティモールを去るということも、軍の命令で服従するほかありません。私が機関銃を担いでバギア台地からおりて坂の向こう側に待っているトラックのところまで行軍していく間、まだすっかり夜が明けているわけではないのに、道端にずらっと原住民が並んでいるんですね。すると、「あゝきた！きた！」と言うて、秘書と一緒にいたソルダルが飛び出してきて、跪いてズボンを引っ張って「トゥアン、ここに残ってください、行かないでください。」と言うのです。

それは困る。私は軍人だから、行かないわけにはいかないと説明してあげたら、道端に並んでいた原住民が皆跪いて名残惜しげに私を送ってくれました。

質問：それは先生だからだったのか、それとも日本人の兵士一般に対してもしたことですか。

陳千武：それは、私と一緒にいた500人のなかの人です。どういうわけで、彼らが軍隊移動を知ったのか、それは分からないのです。しかし行かなければならないから、彼らは涙声で「さよなら」と私を見送ってくれました。

質問：当時、東ティモールには、独立の動きなどというものがありませんでしたか。

陳千武：全然ありません。

質問：陳先生は日本軍と同行しないで、ティモールに残って、という気持ちはまったくなかったですか。

陳千武：そういうことはできません。軍隊だから。

質問：脱走して、残ることはとても考えにくいですか。

陳千武：そこに残って原住民と原始的な生活をするのには精神的に大きなギャップがありました。兵補の隊長である班長の男が、日本軍の兵長か、伍長に叩かれて、それで逃げ出した何人かの兵補を、日本軍側が何人か撃って殺した。その後、その兵補の中の一人が帰ってきて、日本軍の伍長を殺して逃げた事件がありました。その兵補は勿論逃げて行ってそのまま帰ってこなかった。ところで、私がバギアで現地自活をやっているときにひょっとした機会、山のなかに逃げて住んでいるその兵補と出会った場面がありました。そのほかには別に事件はありませんでした。

質問：先生はバギアにおられたときに、500人の労力の提供をうけて、自活の仕事をされたわけですが、同じ部隊の人はどういう仕事をしましたか。それは特別な仕事ですか。

陳千武：はい。現地自活の畑仕事は特別な仕事です。普通の兵隊はやっていないわけです。他にもう一人日本人の兵長がおりまして、隣の水田で稲を植えて管理していました。

質問：話が元に戻りますが、台湾特別志願兵に徴用されたときに、廟に集められて村長さん、隣長さんに「来てください」と言われたのは陳先生だけでしたか。それともほかの人にもたくさん声をかけられましたか。

陳千武：「会議があるから、廟に来い」と隣長、村長が出かけて通知するのですから、私一人だけということはないでしょう。廟の前に並んでいた青年たちも私と同じように通知を受けてきた人たちです。あの時、その長い列でいけば、100以上の人数でした。

質問：それは先生が台中一中というような有名中学校を出ておられたから、そういう人たちにとくに目をつけたのですか。

陳千武：そうではありません。だから、当時台湾の兵役の適齢青年は20万人ぐらいおりましたから、各地区において適齢青年はそういうふうな形で志願をさせられたと思われまます。

質問：今のお話しにあったずっと並んだ100名くらいのなかで、何人位採用されましたか、全部採用になったのではないですね。

陳千武：私の豊原街（台湾の中部台中付近）では3人だけ採用されました。3人で、一人は病気して野戦病院に入り、もう一人は船がラウテン沖に着いてその上陸直前に、沈没した船とともに、亡くなっています。私は運がいいから残りました。

質問：戦後、同じ部隊にいた日本人と接触されたことはありましたか。

陳千武：敗戦になったとき、同じ部隊の中で古兵の兵長がおりまして、「徳島県の俺の家は地主で、妹が一人おる、お前は、台湾なんかには帰らないで俺のところの農業を手伝ってくれないか、俺の妹と結婚してくれ」と言われました。彼はいい兵長の先輩で、その意味で誘ってくれました。けれども、私は、父と母がまだ台湾におるから、やはり帰らなければいけないから、彼と別れました。

質問：日本人とは、戦後ほとんど接触がありませんか。

陳千武：兵隊仲間との接触はありません。

質問：先生と違う体験があるから、会ってみると面白い、という方がいらっしゃいますか。

陳千武：そうですね。台湾では「南星会」という会があります。それは戦後、台湾に帰ってきた志願兵たちが組織した会です。

質問：それは具体的に住所などお分かりですか。

陳千武：本部は、確か台南にありまして、私は忙しいものですから、ただ一回だけその会が台中で開かれたとき、参加しました。「南星会」のメンバーは、日本当時の軍人と一緒になって会合をもったり、それから鹿児島でも、その集団があって皆が集まって楽しく話しあうこともあるそうです。

質問：[周婉窈女史に]台湾の中央研究院では、その「南星会」の方々にインタビューされているのですか

周婉窈：個人個人のインタビューはなかったです。この「南星会」にはニュースレターがあります。

陳千武：中央研究院から訪問したいという電話が、私のところにも入ってきました。ただ、互いの都合が悪くて、結局できなかったのです。

陳千武：あとで知ったのですが、中央研究院の出版物で、志願兵を訪問した本が出ています。

質問：ジャカルタの台湾同郷会ですか、インドネシアの独立運動などの話についてもぜひ聞かせていただきたいのです。

陳千武：ティモールから病院船でスラバヤに帰って病院に入りました。そのとき、その病院に何人かの日本人看護婦さんがおりました。私たち3,4人があそこの廊下を通ったら、看護婦さんが「くさい、くさい」と言うのです。なぜ、臭いかと言うと、私たちの体の匂いが臭かったのです。原住民と一緒に住んでいたにおいが私たちに移っていました。私たちがティモールにいたとき、原住民の特殊なおいを感じていました。その特殊なおいがいつの間にか私たちの身にもついてしまいました。

質問：日本の敗戦、終戦を知ったのはどこで、どういった形でご存知になったのでしょうか。

陳千武：スラバヤからジャカルタに行きました。ジャカルタの港タンジュンプリオクの岸壁に並んでインパール作戦に向う船に乗ろうとしたとき、船長が出てきて、エンジンが故障しているから、出ることはできない。修理には1週間かかるというのです。

質問：インパールは、1944年の話でいいですか。

陳千武：インドのインパール地方では日本軍がずいぶん負けているから、応援しに行くための転戦で派遣されるわけです。私たちの前に、同じくティモールから来た兵隊がやはり二隻の輸送船でシンガポールに向かって出発しています。その二隻の船は途中でやられて沈んでしまいました。シンガポールに着いていないわけです。だから、岸壁に立って船に乗るときは、皆覚悟していました。今度出ていっても同じようにやられるのではないかという覚悟でいました。ところが、船のエンジンが故障したというわけで、再びジャカルタの兵站部に帰りました。それで、兵站部に帰ってから、2日目の8月15日朝、まず華僑の人から、「日本は負けた」という噂を聞きました。その日は、皆が集められて放送を聞いて敗戦の事実を知りました。

質問：ジャカルタの兵站部の場所は、ジャワを占領した南方軍の第16軍ですが、その兵站本部でしょ

うね。

陳千武：そうですね、私たちには分かりません。その兵站部で、敗戦になったのですから、また軍隊の命令で、私たちの部隊第3大隊は、バンドンに派遣されました。それで、バンドンの兵站部におりまして、そこで連合軍の命令によって一時使役をさせられました。使役の後、インドネシアの遊撃隊が独立戦争を起こし、オランダ軍とイギリス軍が入っている連合軍と戦い始めたのです。連合軍は日本の軍隊に命じて、インドネシアの遊撃隊と戦えというわけで、私は重機関銃の銃手として、インドネシア遊撃隊の攻撃を防ぐべく命令を受けました。その戦闘があるときに必ず出動してインドネシア軍と戦わなければならないことになりました。それもしばらくの間のことで、私は当時ある機会でインドネシアの将校と会って語る機会がありました。

私：「インドネシアと台湾とは兄弟だ。」

将校：「なぜ兄弟なのですか？」

私：「台湾は日本の植民地になって50年、インドネシアは日本の植民地になって5年〔3年半〕しか経ってない。われわれは50歳の兄貴、君たちは弟なんだ。」

将校：「そうか、台湾とインドネシアは兄弟で、じゃ、どうするのだ？」

将校に聞かれて、私は「僕が日本兵、君がインドネシアの独立軍で、戦う立場に置かれているけれども、われわれは鉄砲を撃たなければならない時、お互いにその相手を打つことをしないで、弾を木の根元に撃ち込むじゃ」という話をしまして、彼も承知、こちらも承知というわけで、戦争が始まったときは、お互いに木の根元に照準して鉄砲を撃つということを何回かやりました。また日本の兵器庫をインドネシア軍が襲ってくることもあり、その時日本軍は兵器庫と兵器弾薬を全部あげ渡しました。

質問：これはいつ頃のことですか。場所はバンドンですか。

陳千武：8月15日終戦し、9月、10月頃のことです。バンドンにいた時です。インドネシア軍の要求は、兵器を渡せということ、それで兵器を全部渡してしまいました。それから、もうひとつ、部隊の要求で南のタシクマラヤに派遣されて、私たちの中隊はタシクマラヤで、約1カ月くらい治安維持に従事しました。日本軍はインドネシア軍の独立に対しても陰で援助したわけです。そういうことを、インドネシア側はよく知っていました。タシクマラヤに行く途中、5台ぐらいのトラックで行きました。途中で、5,000人位のインドネシア人が道端で「ワー」とかかかってきて「兵器をくれ」というのです。そこで、個人の持っている兵器はあげられないから、その余分の兵器と弾薬をあげました。タシクマラヤで治安の仕事をして約1カ月経ったとき、その治安維持にあたっているその中隊にもインドネシア軍が襲ってきて兵器を全部渡しました。そしてインドネシアの警察が日本の兵隊を再びバンドンに送り返してくれました。それからしばらくして、バンドンの台湾の同郷会から部隊長に要求が来て、台湾の兵隊を同郷会で収容させてくれと言う。乾隊長は快くその要求に応じました。

質問：一番最初に何名いましたか。

陳千武：私たちの部隊、乾大隊に残ったのは21名でした。最初一緒に来た台湾の志願兵は何人か、中隊に分かれていますので総人数は分かりません。そのうちのひとりがもう海の底に入っているし、だから何名だったか、分かりません。そのとき、乾大部隊長は1台のトラックに食糧を積んで私たちを送って

くれました。缶詰やその他、21名の兵隊が生活するのに、1年ぐらい心配することはないほどの食料です。いい部隊長でした。その食料品を同郷会に納めて私たちは同郷会に入ったわけです。

質問：同郷会というのは、軍隊のなかにあったのですか、それとも軍隊と違う組織でしたか。

陳千武：台湾の人でインドネシアで商売している有力者、お金を持っている人たちが戦後、台湾の人を集めて組織したものです。日本軍についてきた台湾の人たちを、日本軍から離して、同郷会のなかで一緒に暮らそうという企てでした。

質問：彼らは台湾から自分自身の意思で行った方ですか。何代か前から住んでいた華僑なのですか。

陳千武：台湾から行った華僑や当時日本の南方進出政策で派遣されて行った行政官、技術者や傭員などです。華僑と言っても日本植民地の台湾から行った者で、中国の華僑とは別です。

質問：国籍はどこでしょうか。

陳千武：日本国の籍です。

質問：その時点、陳先生は日本とは“さよなら”という感じですか。

陳千武：そうです。そのとき、乾隊長は、お別れの儀式をして私たちを同郷会に送ってくれました。食糧まで添えて下さった恩情は生涯忘れられません。当時インドネシア人地区とオランダ人地区とは鉄道を隔てて対峙していました。台湾の同郷会は、インドネシア地区に本部があり、オランダ地区に分会がありました。私は分会のほうに住んでおまして、時々会議などで、本会に行くことがあるので、鉄道を越えていかなければならない。そこには関所があってインドネシアの遊撃隊が守っているので、普通の人は通れないけれども、さっき言ったように、台湾とインドネシアは兄弟の仲ということで、そこを通るとき、「インドネシア・ムルデカ〔独立、自由〕」、「スカルノ・ムルデカ」と叫んで、通してもらうのです。

ところが、その黙契を利用して、台湾人のなかに、悪いことをするやつがでたのです。というのは、インドネシア地区の卵ひとつが1円であれば、オランダ地区のほうで10倍、10円もするので、密輸入をしたのです。インドネシアの警察から同郷会に通知が来て同郷会で処分しろ、というわけです。同郷会で幹部が何人か集まって会議をしてその人たちに、「もうこれからそういう違法行為をするな！」と勧告して、もしすれば処分すると、話し合いました。

その席で、その首脳である楊という特別志願兵の後輩がおまして、私がちょうどトイレに行くために、立ち上がったところを、短刀で私の胸を刺して来たのです。幸い、心臓には当たらないで、左腕の動脈を切ってしまいました。それで、何日かインドネシアの病院で治療したけれども、神経が切れているのに、傷口だけが治って、毎日とても痛く、夜は眠れない。当時、インドネシアの病院神経科の医者はオランダに行っていたから神経手術ができない。そこで、バンドンの日本軍診療所で、自信はないというけれども、再手術してもらいました。神経の痛みはなくなりましたが、麻痺したままです。それで、ジャカルタの総合病院、陸軍病院に転院もしました。陸軍病院で入院している間、病院のなかに2人台湾の日本軍属がおりましたので、2人をつれて、ジャカルタの同郷会に入りました。ジャカルタの同郷会に林益謙（台湾議会設置請願運動の中心メンバーであった林呈祿の息子）という先生がジャカルタ同郷会の会長をやっておりました。そこで、ジャカルタ同郷会の人たちが一緒になって、「明理台湾」を目

標に、「明台会」を組織しました。台湾に帰れば、「明台会」の組織でもって台湾の建設をやるというわけです。

ジャカルタの「同郷会」では、何もすることがないです。ただ台湾の人たちで、芝居をやったり、女の人が踊りをやってみたり、余興で時間をすごしました。

ところが、1カ月たっても、台湾の兵隊を送り返すという消息がないのです。そこで、林益謙先生と私と、それから2,3人の台湾の志願兵で、われわれで、台湾は日本から離れて中華民国に編入されたのだから、「中華民国の大使館〔総領事館〕に行ってお願いをしてみようじゃないか」という相談をして、ある日、中国の大使館に訪ねていきました。そうしたら、「なんだ。お前たちは。なんで来たのか、知らん！おまえたちは日本人にくっついてきたのだから、われわれにはお前たちを帰国させる義務がない」というわけで、ほっぼりだされました。そのときに感じたのは、中国を祖国と思っている人がいるけれども、祖国とは何か？ 祖国の在外公館とは何か？ と、非常な打撃を耐えて、その足で日本の軍司令部を訪ねました。そこの将校が親切に私たちをいれてくれました。

われわれも同郷会に入って長いのにまだ帰れないから、何とか船をできるだけ、早く台湾に帰れるよう協力していただきたいとお願いしました。本間軍司令官が涙を流して、「すまん。我々が連れてきたのに、いままで返せないで本当にすまない」と謝って、「できるだけ早く、何とかするから」と約束してくれました。同郷会に帰ったら、まもなく通知が来まして、一応日本の兵站部に入り、日本の兵站部から船でシンガポールに送られ、シンガポールで約1カ月位船を待ってそこからイギリス軍の船で、香港を経由して基隆に帰ってきたのが終戦の翌年の7月20日でした。

私はシンガポールにおる間、『明台報』を発行して、皆で慰め合おうということで、当時イギリス軍のインド人が守衛をしておる守衛兵所から、ガリ版を借りて、紙までくれましたので、『明台報』を100枚ずつ印刷、第1号から第5号まで発行しました。

質問：その原本はいまどこにありますか。

陳千武：私のところに残っています。

質問：日本語で書かれたのですか。

陳千武：中国語を混ぜて、当時は中国語を書ける人が少なかったので日本語で書いたものです。あの時の「明台会」の名簿は同じ「明台会」のメンバーであった兵隊の後期の張瑞源さんが保管して、私は『明台報』を大事に没収されないように持って帰ってきました。ただ、1947年の二・二八事件があったのち、「明台会」のメンバーに迷惑をかけることを恐れて、張瑞源が保管していた名簿を焼いてしまいました。

質問：台湾ではこの『明台報』は復刻されていないのですか。

陳千武：一応台湾の文芸雑誌で、吉備国際大学岡崎郁子の旦那さんクリスチャン・ダニエルス氏が書いた文章〔「雲間の曙光—『明台報』に見られる台湾籍日本兵の戦後台湾像」『アジア・アフリカ言語文化研究』51号、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所1996年]をそのまま翻訳、発表しています。『明台報』の原文も全部入っております。だから復刻と同じような形です。

質問：かなり台湾では知られていますか、利用されていますか。

元台湾特別志願兵の戦時東ティモール体験

陳千武: 利用はされていません。文壇では知られています。

質問: 「明台」というのは、明るい台湾を意味するのですか？

陳千武: そうです。明理台湾, 明るい, 理屈の通った, 理性的な台湾を作ろうという考え方で, 名称をつけたわけです。

司会: 大変長時間にわたり, 貴重なご体験をお聞かせいただき本当にありがとうございました。